

詩の創作授業とワークショップ

〈言語芸術、書くこと、そして「峠には人の思いが懸かる」〉

岡田 和也 ・ * 榎原 淳幹

本論文がめざしているのは、言語教育と言語芸術の双方向から、統合的にそのあり方をひとつのカタチとして明示することである。いわゆるオーサー・ビジットと呼ばれる活動は、作家が学校を訪れて創作・活動に生徒の興味・関心を向かわせるアプローチであり、確かに、生徒は、創造的な感性と直接ふれあえる環境と機会の中で、彼らの理解と認識と関心は深化され、促される。しかし、それでも、作家が学校を訪れるとなると、その実践は、NPOなどが中心に関与して派遣されることが多く、大学と学校との連携は——それは、レジデンシャルな作家のシステムが我が国には少ないことと関連するのだが——、ワークショップの点からどうあるべきであろうか。そこで本論では、その実践と意義を具体的に提起する。

Keywords : 創作、詩、オーサー・ビジット (school author visits)、言語芸術、凝縮 (intensity)、ESD

「・・・詩人という立場から授業をしてくれたので、・・・分かりやすく、いろいろ伝わってきました。」¹ 「オーサー・ビジット (Author Visit)。文字通り、

作者が、教室を訪問し、その個性と得意分野の知識・技能を發揮して、語ったり、描いたり、写真を見せたり、得意ワザを披露する。「中略」一緒に小説の筋立てを考えたり、詩を作ったり。生徒からもあれこれの質問が飛び出す」²。

引用ふたつ。ひとつ目は、今回のワークショップ実践を終えて、生徒からの感想として、アンケートの形でもらった回答の中にあつたもの。手紙風の言葉。そして、ふたつ目は、オーサー・ビジット——（英語だと、スクール・オーサー・ビジットいうことになるだろう）³——に関する定義的な文章である。ふたつの引用を一緒に重ねると、今回の焦点、つまり、作家が訪れて詩を創作する試みのポイントがなにより浮き彫りになって、うれしい。

もくじ

【0】はじめに

【1】構想と準備

打ち合わせ第①回

打ち合わせ第②回・第③回

【2】詩の創作授業

第1日目・DAY①

第2日目・DAY②

【3】作品と作品展示と、ワークショップの意義

岡山大学大学院教育学研究科社会・言語教育学系 英語教育講座 七〇〇―八五三〇
岡山市北区津島中三―一―一

* 津山市立中道中学校 七〇八―〇八〇四 岡山県津山市勝部三五五

Creative Writing and Poetry Workshop: A School Author Visit

Kazuya OKADA and Junki MAKIHARA

Department of English Language Education, Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka,

Kita-ku, Okayama 700-8530

* Chudou Junior High School, 355 Katsube, Tsuyama City, Okayama 708-0804

【0】はじめに

2014年6月30日及び7月1日。津山市立中道中学校。詩の創作授業。学期末試験がおわった後の7月に入ろうとする時期の二日間（DAY①+DAY②）になされた授業の全容とその準備の詳細を本論は述べる。

これは、榎原が「魅力的な詩をつくらう」という目標を掲げ、第3学年の詩を学ぶ単元の活動としてプロデュースし、思い描いたプロジェクトに、岡田がオーサーとして、そしてコウ・プロデュースとして関わった有り様をあらわしたものである。⁴

対象の3年生は、全体で約150人。5つのクラスの構成は、3年1組が31人、3年2組が31人、3年3組が31人、3年4組が30人、3年5組が31人。総人数、154人。

国語の授業での創作的な実践についての榎原が思いを温めていたものを、具体化し具現化したのだが、榎原・岡田のふたりでの本格的な構想は、学期が新たになった2014年度の春からであった。もちろん、今回の本格的構想以前にも、思いはあった。ふたりは、生徒にとつて、どうすれば作家というものの世間観が伝わってくるのか、あるいは、どうやったら生徒が言葉と創造的に向かい合えるのか、といった、そういう言葉の（そして、国語教科の）魅力の広がり、と深遠化を図っていたわけである。教諭の立場として。作家の立場として。⁵

ところで、岡田は英文学者である一方で、詩人として活動。筆名は、みごなごみ。榎原は、みご「以下本論では岡田のことを、みご、と表記する」のオーサー・ビジットとしての協力起動の企画・展開を意図した。また、みごの活動は、ラジオの朗読番組のパーソナリティや、NPOを介しての小学校での国語の授業のワークショップをした経験を持ってきた経緯などがある。それが、今回さらなる展開をして、中学校でのスクール・ビジットとして実現しようとしたわけだ。

そして、榎原は、1・2年生と、いわゆるもちあがりの学年担当となっており、その最終学年の3年生の夏休み前に、（短縮授業になる前の）通常クラスでの最終週に、満を持して遂行した。この企画を。念入りに計画して。絶好の時期を逃さないように。

さて、以下はそのワークショップによる詩の創作授業実現へ向けての準備と当日の様子、及びその意義をあらわす。榎原の教諭としての意識と夢。みごの詩人としての創作共有の喜び。ここにそれがある。

【1】構想と準備

（1）構想と打ち合わせ第①回

2日間の両日を、DAY①およびDAY②として、連続的に生徒の総人数（約30人を5クラス）に対して行う創作。1クラスずつ、別々に。このフロー（＝枠組み）のなかで、何をするか。ふたりに構想を、コンセプトを、持ち寄る打ち合わせが始まった。

ところで、みごは自作からの作品を選んで、連関する授業展開形を考えていた。「あ・る」（『彼岸バス』所収の作品）なども、最初の討議の土台の候補になりそうでもあった。⁶だが、今回の創作授業の目的は、文学性のパイアスを知る、というよりも、ひとりひとりが書く・創る、ということがプライオリティであるのだから、もう少し生徒がアプローチしやすい作品を介することに、そのベクトルを変えた。（『彼岸バス』に含まれていない詩も考えたが、代表作なので、その詩集からにしたかった。）

そこで、分かりやすさの観点から、さらに加えて、その作品が（中道中学校のある）岡山県北の風景を意識してみごが作成した経緯をもつことから、「はちみつ峠」（同『彼岸バス』所収）が、大きな候補として浮上してきた。⁷

さて、そのような状況で、いよいよお互いに現場に集合。打ち合わせに入る。榎原の持参したカゴには、山盛り一杯の詩集、そして詩に関する本の数十冊。だが、驚くかな、ワークショップのテーマ／モチーフとして、「峠」のテーマは、早くも、打ち合わせの初っ端から決定した。というのも、中道中学校3年が使用している副教材に、石垣りんの「峠」（『中学生の国語』学びを広げる／三年・資料編）、三省堂所収）が含まれており、その頁がいきなり目に飛び込んできたからだ。みごに。榎原に。

さて、そうなる、「峠」というテーマをめぐっての、石垣りんとみごの比較、考察、といった行程はすばやく思いめぐらされた。そう、すなわち、「峠のテーマ・モチーフをめぐって、（みんな）言葉をたのしむ・そして、表現する」というのが具体化してきた授業活動目標となった。事実、この文言は、打ち合わせのメモの最初に記されている。その後の、多くの双方の相談の間でのやりとりでの試行錯誤の中で、一番決定が早かったのがこの目標である。

ここで榎原の主導による授業プラン・計画をまとめておこう。その単元の全体像は、「魅力的な詩をつくらう」とする。授業の行程は、4時間中、最初の2時間を榎原が担当する。その内容は、峠の詩、そして、オノマトペと比喻表

現に特化して、詩の技巧表現を学習項目として絞る。(その2時間分に) 続く2時間分を、「魅力的な詩をつくらう」の一環として位置づけて、みごがオサーとして、楨原は国語科担当教諭として、生徒の中に隠されている創作に關わる種子を採し育てる。この探索そのものが、DAY①・DAY②、つまり、創作ワークショップ授業の主眼となる。

さて、時のテーマの設定、詩の技巧の選択、と要素が定まってきた。その時点での様子をメモと記憶とをたよりに、会話風に再現してみよう――

《みご》

じゃあ、楨原さんとで、ちよつとシミュレーションのようなことをしてみましようか。僕の質問に答えてもらいながら進めてみたいと思います。簡単な質問です。峠、と聞いて連想するのは？

《楨原》

山・・・谷・・・

《みご》

で、その峠的なものから、それに付け加える言葉としては？

《楨原》

「昨日は大変だったけど、明日は大丈夫」

《みご》

では、さらに、それを象徴的にインパクトのあるフレーズはどうと？

《楨原》

「そのくりかえし」

《みご》

ほほお。面白い。で、さらに、それを、オノマトベ的に表現したら？

《楨原》

エレベーターの・・・しゅーすとん・・・って感じですよ。大変おもしろいですね。ちよつと、詩にしてみましよう。

《みご》

こんなやりとりの、言葉の芽。そこからできた、みごの試作。楨原に差し出される――

《みご》

エレベーターの・・・しゅーすとん・・・って感じですよ。大変おもしろいですね。ちよつと、詩にしてみましよう。

《楨原》

エレベーターの・・・しゅーすとん・・・って感じですよ。大変おもしろいですね。ちよつと、詩にしてみましよう。

《みご》

エレベーターの・・・しゅーすとん・・・って感じですよ。大変おもしろいですね。ちよつと、詩にしてみましよう。

エレベーターの・・・しゅーすとん・・・って感じですよ。大変おもしろいですね。ちよつと、詩にしてみましよう。

その繰り返し

ポタンのないエレベータ

しゅーすとん

しゅーすとん

明日はだいじょうぶだから

ドーナツがあるもん

きのう確かめたから。

こんなブレイン・ストーミング的な時間になり、ふたりワークショップ・シミュレーションが進んだ。それはこの様に――

《楨原》

では、やはり、当日の授業までに、私は、オノマトベ、比喩の項目理解の徹底化、そして峠の比較を、ワーク作業でしておくことにします(図版②③参照)。

《みご》

それは、とても、うれしいです。ところで、すごく突然なんです。詩を紙コップに書いて、それを展示に使うというの、国語的領域から少しずれてしまいませんか。どうでしょう。紙コップ。それぞれの書いた峠ポエムの紙コップが飾ってある。最後には、「中道中峠」という大きな作品をつくりたいな。どうでしょう。僕だけでもない、生徒さんだけでもない、みなさんと一緒のかたちで・・・。

《楨原》

私も、モニユメント的なものができたらいいと思っただけです。・・・そうだ、いい空間があります。・・・ところで、紙コップのアイディアですが、そのコップは、どちら向きに書くんですか。やっぱり、普通に飲む時のように方が上、それとも、峠の連想で、山型だから、逆に底が上ですか・・・コップの向きは。

《みご》

あ、そのコップのなかに、なにかをいれたいんですよ。それぞれの生徒さんの思いとか。詩に対する。自分の創った詩を巡るさまざまななにかを。詩は、凝縮なので、コップは、上向きを考えています。

《楨原》

中に、何か入れるんですね。例えば、生徒の書いていたその詩を考えていたワークシートそのものとか。ぐしゃぐしゃってまるめて、コップに入れて、コップの外も中も、ポエムでいっぱい。ですね。その中に入れる紙、通称、グシヤ紙って、ことにできますね。思いが詰まっています。

《みご》

それから、これは、可能なのですが、私は、朗読を大切にしているの、その最終のカタチがどのようになって、その大きな作品の前で、放課後詩の朗読ライブとかもあつたら、もしかして、どうでしょうか。

いろんなアイディアが出ていたわけだが、ここで、まず、楨原が「いい空間」と言及しているのは、後述するような3年生の教室の間に存在するホールのよ

うなスペースのことである。

また、アイディアの展開のあったコップ案は、この打ち合わせの段階で、ペンの具体案、コップの底に、名前をペンネーム風に書かせること等々、いろいろの更なる提案を交換した。インスタレーション的仕上がりに関してのみこのねらいも含めてのことである。詩の言葉は「凝縮」であるというコンセプトは、アメリカを代表する詩人のひとり、エズラ・パウンドの『詩学入門』にあるものだが、まさにその実践版であると考えていい。快哉。まさにまさに……。後述するが、生徒からのアンケート回答でも、生徒のひとりには、「コップに書くなって、紙をぐしゃぐしゃにするなんて、みんなの詩を（中道中峠）として峠に見立ててかざるなんて、みごさんらしい！」（5組）としていて、その指摘と反応は、ワークシヨップの意義を含めて、ねらいが功を奏したと考えていい。

この微妙にも思えた試み——空間全体にまでひろげていく言葉の創造的世界のクリエーション——は、実際のところ大きな効果をもたらした。これもまた、後に生徒の反応にみられることだが、ワークシヨップに参加することによって、詩だけにとどまらない、空間的広がりを知り認識して、文字による空間の言語芸術の可能性を、生徒も榎原もみごも、あらためて知る事になる。（図版⑭参照）

さて、ふたりは、次回までの取り組みの確認をして、第一段階の打ち合わせを終わった。

（2）準備／打ち合わせ第②回、及び第③回

「夢」と大きく書かれた円がいくつも。それぞれに生徒の夢が書かれてある。そんな天井が様々な思いで彩られた素敵な教室で、第2回目の打ち合わせが始まった。そこは、中道中学校の教室。

今回の（第2回目）打ち合わせのトピックは、さらなる授業活動内容の交換と、インスタレーションのための買い出しであった。まずは、教材提示器でのシュミレーションをする。打ち合わせは現場での臨場感を体感しながらなので、同時並行的に様々なことに気付きながら、意見の交換を有効に進められた。先回に決定していった方向性をまとめてみた。そうして、そこで、榎原の教師としての経験的感覚からの大きな踏み込みの発言。すなわち、生徒の好きな物、生徒の関心のあるものと、峠のテーマ・モチーフを重ね合わせるのいいのではないか、という提案。ゆえに、あまり、「はちみつ峠」の作品のことに

は敢えてふれないで、「○○峠」（あるいは「峠の○○」）というタイトルがくるようにする。

そして、サイズ（行数）的には、5行ほどのものを考える、だが、一方で、最終の2行をオープンにしようとしてしまうと、生徒の反応を予測できない、という問題……。など。

またここで、再び榎原が生徒役をしながら、シュミレーションでふたりで探る。このようなサンプルが一応できてきた。「○○峠」の例である——

「アゲハ蝶峠」

何になる？

ばたばた

僕の夢

そして僕の明日

だがこれは、みごの誘導がかなり入ったもの。そのナビゲートのために、中学生には文学性の層でのジャンプしにくい例になっている。実際には、ここまですべて生徒は書いてこない、と判断した。が、それでも、ふたりとも、5行の作品に仕上げることに、そしてその3行目にオノマトペの使用すること、この2点については、典型的に試してみようではないか、という案に安定してきた。

みごは黒板に（あるいは、プロジェクターのホワイトシートに）、このように書いてみはじめた——

・ もーいもーい
・ えっせえっせ

・ ばたばた

・ すやすや

・ どんどこどんこ

あまりない身近でない、不可思議な擬態語も大丈夫なのだ、否、むしろ魅力的にできることを伝えようと榎原・みご共に意見は一致する。オノマトペの変奏と変様。

さらに、もうひとつ考えてみた例をあげてみよう。確認だが、榎原が生徒役でみごが指導している——

「しわくちや峠」

僕の前にしわ
僕の後ろにまつすぐな道
しわくちやしわちゆ
なんだろう、この音は
そして、なおせたりなおせなかつたり

これだと書きやすいかも知れない！突然みごに沸いた、この「僕の前に・・・」
「私の前に・・・」のコントラスト。そこに、榎原も大きく賛成。

そこで、さらに榎原のアイデアで、生徒の好きなものを、峠に加えさせる
典型的なところへと立ち戻る。例えば、部活動――

「バスケット峠」

僕の前に敵がある
僕の後ろ敵がある
バンバンバン
なんだろう 峠のような明日
そして 峠のような昨日

さらに、もうひとつ――

「ポケット峠」

僕の中の坂
忘れ物した坂
とほとほとほと
峠のような帰り道
そしてポケットのような穴

だが、この場合のふたつ目の例は、タイトル以外は、完全にみごの独走。中学
3年生には、(榎原が予測した)もつと身近な「ドーナツ峠」とか「チョコ峠」
とかを視野に入れた方がいいことが分かってきた。そして、この時点で大きく
動きがあった。榎原が、ワークシートのアイデアを提案。空所にして枠をいれ

ること、それに番号をつけること。それによって生徒をリードする、そうサポ
ートできるはずだと。

生徒の方からのタイトルを「○○峠」に設定して、「えっ、そんなものを一
緒にしているの？」という驚きの反応と、その後の脳内の化学反応と想像のあ
りようと、そして、それへの的確な対応の仕方とに、色んな角度からの集約化
がそろそろ足踏みをそろえてきて、みごも榎原も、ねええそうワークシッ
プの一番いいポジショニングがみえてきた。¹⁰

さて、一方、あのインスタレーションのアイデア。そう、言葉の空間。榎
原が線を実際に、稜線伝いになるようにさらに強い案を示す。より具体的で強
烈なインパクトのある用意の工夫と創意工夫が必要となってきた。外の稜線に
繋がっていくことを、やはり実行することを再確認。空間は、ホールと呼ばれ
るタイルが壁に貼ってる空間。その様相をよくよく確認の上、買い出しへ。ネ
ット、紙コップ、洗濯バサミ、など。大雨の中。ネットは、長さ縦2メートル
横6メートル強。

そして、再び、教室にもどり打ち合わせの続きに戻る。かなり煮詰まってく
る。各種プリントについてのアイデアの交換。まずは、サンプル4つの用意
が必要と榎原から指摘がある。(サンプル自体は後述)。作成の際に、みごが榎
原から要請されたことは、生徒の視点からの貴重なものであった。それは、以
下の3点であった――

* 僕、わたし、(俺もいいが、できたら避ける)

* ナンセンスも(頭韻をきかせたものも含んで) ライトな詩の可能性も
伝える

* タイトルのありかたとして、「○○峠」と、「峠の○○○」のどちらも
ありと、示す

さらに、ふたりで共通理解した特筆すべき留意点は、「**敢えて**、生徒が、その
サンプルにとらわれすぎてしまわないようにする」、「**創作の想像力をはばんで
しまわないようにする**」、「**似たものつくりになりかねないのでプリントアウト
はしない**」、であった。そして、次のようにステップを確定――

*黒板の4隅にプリントアウトしたものを提示する
(マクネットをして榎原当日までに用意)

*説明時にポイントをも、メモをとらせる

*みごは教材提示器用に、別にA5版のものをDAY①当日に用意

以上が、サンプルの4点自体について。そうした《ここに気をつけてね》タイムから、一転。ワークシートの活動の時は、メリハリをつける。みごは、椅子ではなく立って、ライブ感をだして。ペンでどんどんどんと、ダイナミックに説明していく。(後述、図版⑥参照) そういう想定が生まれる。

こうして、打ち合わせの確認、そして、再確認。そこで、もつとも大切ともいえるワークシートについては、今回の(つまり第2回目での)打ち合わせの状態を基盤にして、次回の(つまり最終の)打ち合わせで修正を加えて行く。そのような中で、6月30日までの榎原による授業進行と、その配布物を作成がなされる。ふたりが直接会えない間に、メールで交換できる資料の再確認もした。(図版②③④参照。図版③は、実際はB4版サイズ。)

いよいよ、最終的打ち合わせ。第3回目のデイスカッション。残された時間を、最終リハとプリントの確認、インスタレーションの準備、などにかける。

まずは、サンプルのシミュレーション。みご、説明。それにたいして、榎原の要求。厳しい、シリアスな意見提示。榎原がみごにした生徒へのアドバイスは、みごの目をみひらかせるものであった。すなわち、「4つは、詩を作るヒントになるから、そのエッセンスがあるから、よく聞いて、自分が書く時に生かしてね!活用してね!」の一言を加える必要がありますね、という助言のあり方。それは、ゆっくりとはつきりとなされるべきもの。

そして、みごの目をさらにみひらかせたのは、すばらしく視覚化された(榎原作成による)比較のチャート。石垣とみごのふたつの峠の詩をくらべたもの(図版⑤参照)。迫力のある、それでいて、みご「はちみつ峠」寄りに、無理矢理になっっていない自然なカタチでなされたもの。

最後に、再度、ワークシートを考える。何度何度も。そうして、最終案ができあがり、それをいよいよ印刷。(詳しくは図版⑦参照。実寸は、A4サイズ使用。)紙の下半分は空白としている――

下の部分に空白を設けたのは、活動のありかたとリンクしているが(後述)、インスタレーションの用意も万全になっていた。そんな中、ワークシopp前日の打ち合わせが、続いた。

【2】詩の創作授業

■第1日目■DAY①

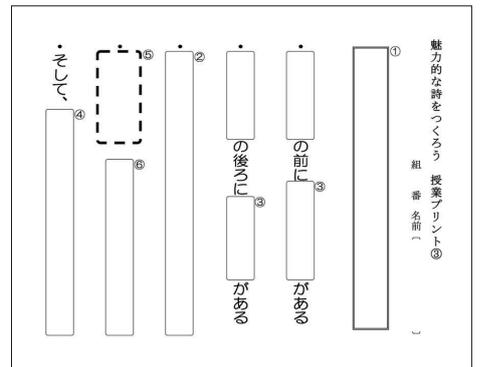
おはようございます。詩をかきましょう。さて、いきなりは、たいへんだよね、って言って、ほぐして、4つのサンプルに進む。教材提示器とホワイトシートを黒板につけて。カーテンをして。

カーテンは説明の途中で、どっと、開けて、インパクトをみせる。「あれが稜線!りょう・せん!そう!峠につながる!あれだよね!」。このデモンストラーションは、実際、(事後の感想で)生徒が、「印象に残ったことは、カーテンをパツッと開けて、山を見たことです。」(3組)との具体的意見としてくれている。それは、なによりの反応であった。

さて、サンプル4つ……。まずは、最初のサンプル――

【サンプル①】

「峠」



峠で座った
峠で見つけた
峠のいいところ

わたしのいいところ

そして、トンネルは
どこだろう

この第1のサンプルのポイントは、

- ✓短く書く
- ✓問いかけを使う
- ✓コンパクト
- ✓凝縮

ワークシートを最初から配っておいて、この時点で、下の空欄に詩の書き方のポイント／エッセンスとして生徒に丁寧に書いてもらう。ゆつくりと。理解してもらいながら。

次の例はこのようなもの――

【サンプル②】

「峠」

峠で
腰抜かして 転んで
子ダヌキも
コンソメスープ
飲みながら 転んで

峠で
僕はころばない

このサンプルのポイントは――

- ✓音をおもしろく
- ✓内容もコミカルも可能に（ナンセンス）
- ✓韻を使ってみる

サンプルの中の、こ・し+こ・ろんこで+こ・だぬき+こ・んそめ+こ・ろんでの、K音の頭韻に笑いが起きる。

そして、さらに続いて――

【サンプル③】

「峠」

峠で わたしは 見た
山と空の間の線を

峠で わたしの見た線は
しなやかで
つよかった

わたしは あの線が
好きだ

このサンプルのポイントは、

- ✓対比を使う
- ✓勇気をもって自分の中の何かを表現してみる
- ✓（好きだから、関心を持っているから）書いているのだから、好きだ、という直接表現しないで、ほかの表現をしっかりと探してみる
- ✓ラストのラインはかっこよく！

実は、このサンプル③は、一番、やっかいでいながら、それでいて一方で、生徒のひとりが、なんと、〈好きだ↓たべたい↓のむ！〉のイメージに連想を膨らませた好作品へと繋げられるステップになったサンプルであった。さらに、最後の「ラストのラインはかっこよく」のエッセンスは、この点に多くの生徒が苦戦しながらも、生徒の心を鷲掴みにし、生徒自身達が後のワークショップ

の際に、特に喜んでいた。
そして最後に、――

【サンプル④】

「峠の笑顔」

峠の前と後だと

全然違う

光も違うし 影も違う

息も違う 声も違う

そして 行こうかな

峠の明日へ

以上が、サンプルの4つである。

さて、これで、イメージーション・ウォーミングアップが終わり。生徒自身、リラックスしてきて、ワークシートへ本格的に移行する時間帯に到達している。

ワークシート(⑦参照)に、まず書きはじめるのは、自分の峠。そして、その自分の峠のイメージが保持している(連想される)オノマトペ。(このふたつが、空所①そして②。)そして、連結して、その①と②で、重層化された言葉の世界で喚起される、自分の前にあるもの・後ろにあるもの、これが空所③になる。

量的には少なくみえるが、求められたタスクが深い創造性と関わっているの
で、さすがに生徒の方は、どうしたらよいかと、最初はざわめく。だが、その
のざわめきこそが、「自分だけが書ける自分だけの世界」への一歩となる。

榎原とみごは、徹底的にこだわりながら、それも、1対1の指導をふまえながら、そしてさらには、みごは、頻繁に教材提示器でのシェアリングも含みながら、授業を進めた。榎原とみごのチームティーチング的創作ワークショップが本格的にうごめいていた。今ここに、稜線への希求はあるが、境界線はない。生徒たちの大きな想像力の爆発を2日目に見るわけだが、すでにこの時にその変貌の「顕れ」が、弾力的な複数指導により促進されていた。

言い換えれば、こうなる。個別なのだけれど、生徒の間の肯定的「ずれ」が、

「創作」となる瞬間瞬間が重なっていくと言う意味で、共通項があったと…。
すなわち、連なり始めていたのだ。教室の中の、新しい視座の世界観の共有。
ざわめきの戸惑いの背中をおしながら、榎原とみごは、ふたりして、創作の空
間のあいだをめぐっていた。

ここで、振り返っておく。つまり、第1日目のタイムテーブルを――

00…000〰01…000

イントロ

01…000〰02…000

詩人と詩のこと

02…000〰015…000

サンプルのイントロ

15…000〰40…000

ワークシート

空所①をタイトルとして決める

空所②に峠へのオノマトペを考える

空所③で冒頭2行を書く

そのループを3回程度して定着

40…000〰50…000

解説とワークシートの回収(翌日また返却)

ここまでは、授業自体。

その後、みごと榎原は、回収したワークシートのチェック。みごの方は、加えて、中道中峠のために第1日目とこれまでの経緯をふまえたオリジナルの詩を作成する。そして、書道家みごなごみにもなり、インスタレーションの用意をする(後述、図版⑧参照)。これは、補完の役を、みごがオーサーとしたわけだ。こうして、第1日目の活動と作業、そして、第2日目への準備が終わった。

【第2日目 DAY②】

1日目の振り返りから。シェア。一日寝かせた後の、自分で修正したくなるワークショップの醍醐味。自分自身をも寝かせて、熟成して、距離をおいて、聞ける。見える。

それでも、ここからの距離が長い。ワークシートの残りの空所に書いていく。
④⑤⑥。実際の指導は、さらに臨機応変にした。というのも、1日目に比べ、

生徒の反応が非常に良かったし、また、よりよくしたいという生徒のモチベーションの高まりがはつきりとあったから。¹¹

具体的な活動内容を述べよう。空所⑥のところに、書き入れるものは、⑤の部分と一文になる。⑤に問いかけの言葉を入れることにしたのは、打ち合わせの最終段階になってからであった。そこには、《なんだろう》という、日常使いそうで、使わない表現の不思議さを含む言い回しを挿入した。これゆえに、名詞↓名詞のパターンにおちいらないように、その動詞的動態的なベクトルを付与してあげることがオーサーとしてできる。

その工夫にはひとつの理由があった。それは、⑤の問いかけの付与で日本語としてのあやうさも受け入れもできやすくなると思われたからだ。その過程が、思考を、そして、発想を、粒ぞろえにしまわぬ道をつける。もつとも、その問いかけの機能的役割を考えて、この空所に入れるものとしては、他にもふたつ加えて三択にしていた――

- ✓なんだろう
- ✓そんなことない
- ✓あれからね

生徒は、このうちのひとつから選んで、詩を展開できる。

そして、次行、つまり、かっこよく決めなくてはならないラストのライン。このあたりで、オーサーと生徒との関係は、かなり濃密になり、ひとつひとつの言葉の選択にも生徒は熱心になっていく。個と個、そして、そのやりとりをシェアリングするダイナミズム。オーサー・ビジットは実質的ハイライトを迎える。

そろそろ、作品とインスタレーションとの関係を生徒に詳細に、そして、ポイントを押さえながら説明しなければならなくなる。作品提示が匿名であること。そして、それは、カップの底に書くこと（この匿名性は意図的の中）。カップ。ペン。洗濯バサミの指示。そして、通称ぐしゃ紙。

ぐしゃ紙には、その詩をつくるまでの経緯や思い、すべてを書いてギュッとしてカップの作品の中に入れていいんだよ、と伝える。この時点でもまだ、生徒は驚いている。いい意味で……。そう、その様子はずっと興味津々であった（図版写真⑨参照）。

ところで、生徒の作品からいくつかをあげておきたい。「みずいろ峠」「頭痛

峠」「アメリカン峠」「漆黑峠」など、多くの興味深いタイトルの作品がある中で、2つの作品を（図版⑩参照）――

「小峠」（1組）

僕の前に 道がある
僕の後ろに 歩いてきた道がある
チョボチョボ チョボチョボ
なんだろう 目をつむっていただけです
そして、峠を下っていく

「峠峠」（1組）

私の前に 峠がある
私の後ろに 峠がある
テクテクテクテク
なんだろう ふしぎな気持ち
そして、わたしは歩き出す

オノマトペに、「チョボチョボ」を使える大胆さ、この作者にとって、ちいさな峠とすることで、そのひたむきな人生観のようなものが読者に伝わってくる。他方、峠にさらに峠をつけて、タイトルにした、ナンセンスの感覚を内包する作品の方は、シュルレアリズムなのか、それとも不条理的なのか非常に現代的な自問的作品となっていて、最後の「歩き出す」のパンチラインが効いている。こうして出来上がった作品が、授業がクラスが終わることに、ネットにどんなと広がり、峠の輪郭も、しっかりしてくる（図版写真⑪⑫⑬）。だんだんできていく。他のクラスにじやまにならないように、チャイムがなつてから洗濯バサミで丁寧。ひとりずつ。ひとつずつ。

再び、第2日目のタイムテーブルも振り返っておこう――

00..00〱02..00
イントロ
02..00〱10..00
ワークシートのシェア（3人程度）

- 10…00〓15…00
 変更・修正・モチベーションの確認
 15…00〓25…00
 ワークシート⑤と⑥と④への書き入れ
 25…00〓27…00
 コップ説明・グシャ紙・洗濯ばさみ・ペン・ネーム
 27…00〓48…00
 作業とコップの仕上がりでのシェア
 48…00〓50…00
 朗読（ポエトリー・リーディング）のお知らせ

【3】 作品と作品展示と、ワークショップの意義

第1日目授業終了後、みごが毛筆で前日にインスピレーションを受けてかいていたものを（図版⑧参照）、空間に加える。それは、以下のような作品である――

みていてごらん
 山の上と山の下と
 風がとおる
 わたしはそれを
 のんでみたくなる
 そして古い人と
 そして新しい人よ
 中の道 道の中 中の道

込めた思い。言葉の選択。中・道・中。山・上・下。好きだから・飲みたい。この作品を、模造紙ではなく、和紙のような素材にしたのは、生徒の作品のコップをはったネットの雰囲気とのバランスから。榎原のこだわり。みご作品と合体させてコラボの完成。それは、ワークショップの完成。（図版写真⑭）

この言語芸術作品「中道中峠」に寄せられた、生徒からの感想をいくつか紹介しておく。手紙のようなその回答は、例えば、「最初は全くはかどらなかつたけど、みごなごみ先生のアドバイスを受けるるとすぐに色々思いついて、影響力

がすごいのかな？と思いました。」（5組）「詩とは最初から1文ずつ書くものだと思っていたのに、授業ではいろんな順番で書いていったので、びっくりしました。でも、その方がかきやすかつたです。自分の思ったこと、感じたことを詩にするのはおもしろかつたです。」（4組）。ここには、準備したワークシートの質の高さが反映されて、練られたフロアのしなやかさの効果がある。それにしても、この現場の教員とオーサーとのプロジェクトのプロデュースを意図した榎原の勇氣と想像力に、生徒は楽しめ感動していたようだ。

また、「…みご先生の詩の読み方は最高でした。これからもあの読み方は続けてほしいです。先生の詩をみたときにはどんな方がこられるのかと思いましたが、イメージしていた人と全然違ってびっくりしました。詩をつくることは楽しいんだなと思いました。」（5組）。

さて、ワークショップ終了後の翌日、榎原からメール・メッセージが。言語創作を超えたレベルでも自分たちの置かれた環境を大切に作る気持ちの芽生えがあつたとの知らせは、みごの望外の喜びであつた。忘れずにここに加えておきたい。

振り返ってみるに、「みごなごみ先生、2日間ありがとうございました。2時間という短い時間でしながすごく楽しかつたです。」（1組）と言ってもらえたのは、このように解釈できるかもしれない。すなわち、最初みごが、中学生と自分との架け橋的作品は「はちみつ峠」である、と出発していたが、それが、円環的に、石垣りんの「峠」に連結していた、ということかもしれない。もとより、峠というコンセプトは、この時代そんなに、頻繁に思い浮かべる空間ではない。かなり少ない。「峠をこえる」という慣用句くらいだろう。あまり日常的な空間でない言葉に、そこで、「○○峠」とすることで、創り手のその思いが、そしてその性格が色になる。書き手がその行為で表裏一体になる。

実際、みごは、このワークショップの2日間を終えた後の最初の週末、郊外に峠をこえて、山の稜線をずっと見渡しながらか国道を運転している間、「峠」のテーマの適切性を反芻していた。

数日後、また、榎原からのレポートがあつた。「今日も中道中峠は好評で群がりが出ていました」と。そして、続いて、榎原の（今度は）独自の言葉。「峠と峠は道でつながっている」。このつながりに、みごは気がついた。そう、石垣の作品に、「峠には人の思いが懸かる」とあつたことを。そのことを、みご

は改めて思い返していた。
最後の最後に——生徒のひとりから「中道中峠」へのこの言葉——「すごくきれいでした」。

謝辞：本論文を、中道中学校関係者のみなさま、そして、2010年度（2011年3月5日～15日）岡山大学大学院教育学研究科発達支援学系特別支援教育講座・カンザス研修参加者のみなさんに捧げます。

参考文献

- 上野行一 『まなざしの共有—アメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』 淡交社（2001年）
- 岡田和也 「英語圏のネオロジ—詩を応用した児童詩創作の試みと意義—教育」 学部教員養成課程での詩のワークショップの講義と可能性—（岡山大学教育学部研究集録 133号 1頁～20頁、2006年）
- 『こころの詩』 大賞コンクール制定委員会・編 『こころのうた』（佼成出版社、1996年）
- ロバート・チェンバース 『参加型ワークショップ入門』 明石書店、2004年）
- 中野民夫 『ワークショップ—新しい学びと創造の場』 岩波書店・岩波新書、2004年）
- 藤井貞和編 『創発的言語態』（東京大学出版社、2001年）
- 穂村 弘 『短歌という爆弾』（小学館、2000年）
- 堀 公俊・加藤 彰 『ワークショップデザイン——知をつむぐ対話の場』 くり（日本経済新聞出版社、2008年）
- エズラ・パウンド 『詩学入門』（富山房・富山房百科文庫、1979年）
- サラ・ファネリ みごなこみ（訳） 『オニオンの大脱出』（ファイドンジャパン、2012年）
- みごなこみ 『彼岸バス』（新風舎、2004年）
- 蓑 豊 『超・美術館革命—金沢21世紀美術館の挑戦—』（角川書店、2007年）
- 美馬のゆり、山内祐平 『未来の学び』をデザインする—空間・活動・共同体—（東京大学出版会、2005年）

横尾忠則『捨てるVS拾う』（NHK出版、2003年）

ワークショップ知財研究会（編集）『子どものためのワークショップ—その知財はだれのもの？』（アム・プロモーション、2007年）

Collom, Jack. *Moving Windows: Evaluating the Poetry Children Write* (Teachers & Writers, 1985)

Collom, Jack, and Noethe, Sheryl. *Poetry Everywhere: Teaching Poetry Writing in School and in the Community* (Teachers & Writers, 1994)

Heard, Georgia. *For the Good of the Earth and Sun: Teaching Poetry* (Heinemann 1989)

Kowitz, Steve. *In the Palm of Your Hand: A Poet's Portable Workshop : A Lively and Illuminating Guide for the Practicing Poet* (Tilbury House, 1995)

Moire, Dave. *The Adventures of Dr. Alphabet: 104 Unusual Ways to Write Poetry in the Classroom and the Community* (Teachers & Writers, 1995)

文末注

- 1 中道中学校（詳細は本論文中後述）の3年4組の生徒からの感想。同様に、ワークショップ参加に対する生徒からのアンケート回答文書を引用する場合は、以下、そのクラスを、例えば、（4組）として括弧内で示してあらわす。
- 2 たとえば、オーサー・ビジットに関するインターネットの記事に、次のようなものをみつける。朝日新聞社主催のオーサー・ビジット・プロジェクトのサイトからである——
<http://www.asahi.com/information/release/authorvisit/> (Retrieved July 16, 2014)。そういえば、先日も、岡山市内の小学校で、舞台芸術教室ということので、プロのパントマイムの演出指導を受ける小学生の姿が報道されていた（「山陽新聞」2014年7月16日付け、28面掲載）。
- 3 日本語での school author visits の通例表記例。
- 4 所在地 岡山県津山市勝部355
- 5 同様の、オーサー・ビジットを、みごは、ワークショップと展示を通じ、真庭市立勝山小学校で、2007年8月31日、そして、翌年の2008年8月31日にも行っている。特に、2008年は、協力を全面的にNPOとのタイアップにより得ている。レジデンシャルなもので、NPOひしおとの

連携。「みごなごみのこども」ことば作り」。その際のワークショップのチラシは視覚的にも魅力的であった(図版①参照)。展示期間、2008年9月5日(金)～16日(火)まで。於NPOひしおホール。前年の2007年ののは、こどものワークショップ・「あしたのあしのし」。

6 代表作は、『彼岸バス』(新風舎、2004年、松崎義行賞受賞)。さらに、また、最近では、筆名で、絵本の翻訳も手がける。サラ・ファネリ『オニオンの大脱出』(ファイドン出版、2012年)。

2006年には、国民文化祭の朗読詩部門で山口県議長賞を受賞。受賞作「ななつたん」を中原中也記念館で朗読(2006年10月9日。朗読は同年国民文化祭発行のCDに所収)

平成16年度・第39回岡山県文学選奨。受賞作品「パン屋・ガランゴロン」「あきまにゅある」「ばらばい」。

さらに、建築空間プロデュースを、鈴木尚子と、詩人としては異例の空間コラボレーション個展として開催。『こいへや、こえへや、みごなごみ展』(2005年)。他に、各種メディアでの、コラボレーションの実演をしたり、精力的に、朗読空間を、2006年のプラネタリウム(岡山県立児童会館)などにさだめて、様々なカタチで自作の詩をリーディングをする。

国内だけでなく、2007年には、フロリダで開催されたアートプロジェクト参加。その際、タンパ市街にあるFM局(WMNF 88.5 <http://www.wmnf.org>)にオーガナイザーと単独ゲスト出演(この際の音源については、アーカイブが、URLから出てくるが、それは、iTunesを経由してのもの。
http://sound.wmnf.org/sound/wmnf_070615_130000_ArtEar_255.MP3

他に、「こどもとことばとこころ」「みみみみみみ、みがみつがある」が講演等としてある。また、大学での創作クラスも担当した。

7 詩の朗読活動もするが、朗読ライブばかりでなく、ラジオ番組も。FMくらしき・88.8の局で、詩の朗読コーナー「白壁に耳なごみ」を、205回にわたり放送(2004年度放送、2004年4月～2005年3月)。

8 『彼岸バス』、106～107頁。

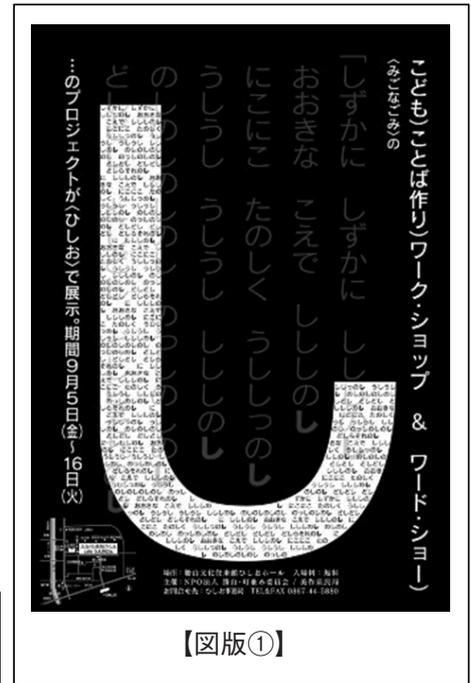
9 『彼岸バス』、124～128頁。

10 そういえば、穂村弘は短歌入門書(『短歌という爆弾』)で、こう書いている。「ここで短歌に不可欠なもうひとつの要素である驚異について考える必要がある。共感⇨シンパシーの感覚に対して、驚異⇨ワンダーの感覚とは、「いまままでみたこともない」(116頁)。

「なんて不思議なんだ」という驚きを読者に与えるものであると同時に、書く本人がワンダーが必要なことを考えなくてはならないのだ。オーサーと一緒に、今、自らもオーサーとなつて生徒達は驚異を探つて言葉にしていると言っている。なお、穂村氏の同書(146頁)のシェイクスピアへの言及と空白のことも多いに参考になる。

ところで、「はちみつ峠」はネオロジ(造語)的発想の詩であり、それは、それまでにないものを創ってしまう。みごの他の作品、「バケツ女詩人」「つきおんな」などのラインであったことも、みごは詩人・オーサーとしてこのワークショップとの関係で再確認した。

11 資料に示したアンケートに、あらたな峠の詩で回答してくれている生徒も何人もあったほどである。



【図版①】

魅力的な詩をつくらう 授業プリント①

組 番 名前

募集期間

○ 『魅力を感じた詩』を紹介しよう。

○ この詩を通して感じたこと、考えたこと

○ この詩の魅力を感じたところ、オススメしたい理由

【図版②】

○ 二つの詩を読んで感じたことを自由にまとめましょう。

詩	石垣りん	観点	はちみつ詩	みこなこみ
感じたこと	理由・根拠		感じたこと	理由・根拠
うすい赤	通る人が少ないから。	色	水色	涙色
サー	風の音	音	ぼつり	涙が落ちる音
静か	通る人の数が少ない。	雰囲気	ゆるい	一人。涙線がゆるい感じ。
甲るやか 下山	甲るい感じ。	情景	涙	涙だけがある
秋	峠り秋	季節	秋	静かで温度が低い。
22	静か	温度	20	少しづつ感じ。
人	時に人が通る。	登場人物	私	私の話。自分の話
顔(下)	だまがある感じ。	漢字	涙	涙のほなしだと思へう。
夕方	夕日がさしかかっている。	天気	ふわふわと	心がやわらかいように。
		印象に残った フレーズ	はちみつ峠	日や、涙のよう感じる。
		疑問を感じた こと		

○ 「魅力を感じた詩」と「その理由」を書きましよう。
 ・魅力を感じた詩
 峠

「静か」とは言っていないが、相手に「静か」という表現をして
 いる感じに魅力を感じた。

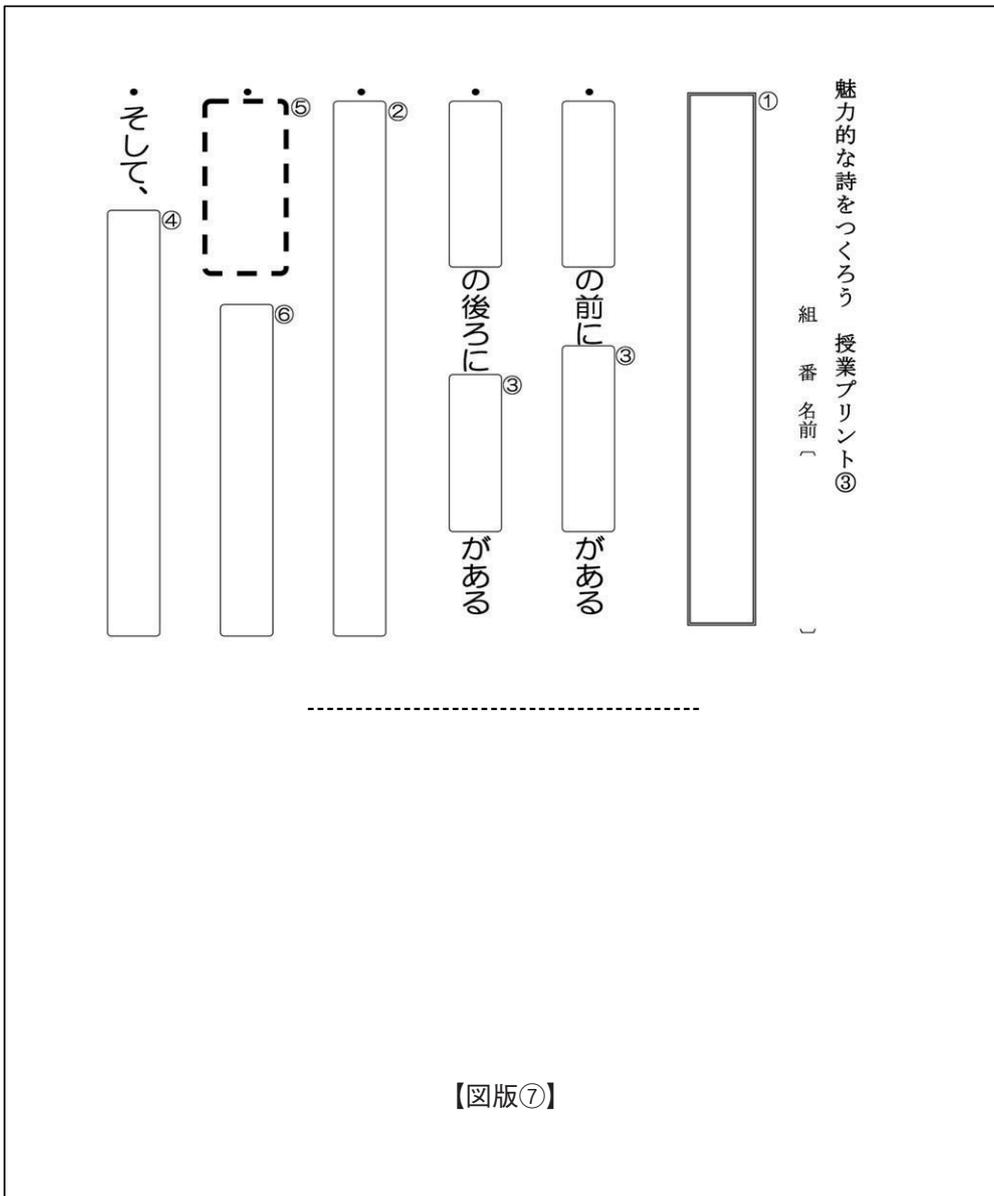
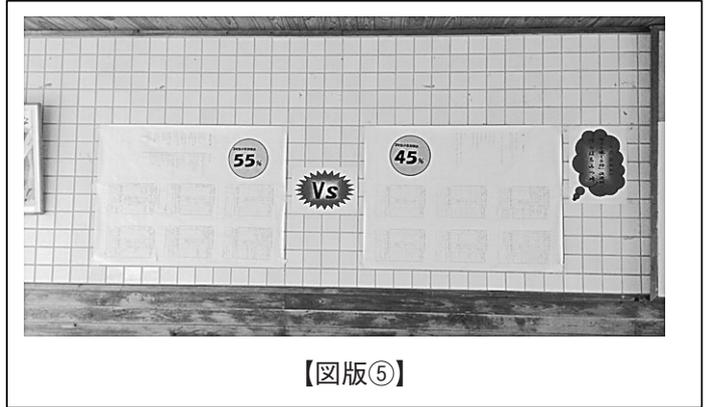
○ 二つの詩を読んで感じたことを自由にまとめましょう。

詩	石垣りん	観点	はちみつ詩	みこなこみ
感じたこと	理由・根拠		感じたこと	理由・根拠
深緑	林さび	色	黄緑桃	丸い・やわらかい
しんと	アガしんと	音	ぼとぼと	はちみつたまる
静	くみだら返って	雰囲気	丸い	あたたか、ふんわり
大木の初 一人	パワ	情景	暑い色い 山をのぼる	ちやうちちやうち
冬	しもがおひつ	季節	夏	とてもかんかん
あたたかい 息が白い		温度	40%	アたらた
大独	しばかり中	登場人物	頭のいい 小女子	本が大好き
小雨	まだ朝	漢字	恋	抜け出すんだ
目取初	独りな感じ	天気	ほろりとした 涙	いそがなま
最後の 三行	色が違う	印象に残った フレーズ	信子のつぼみ	可愛らしい
まじり	にがい・洗	疑問を感じた こと	味	きん味不味。
小	ひっそり	大さ	味	あっぱい。
		この子	好きなんが	好きなんが

○ 「魅力を感じた詩」と「その理由」を書きましよう。
 ・魅力を感じた詩
 はちみつ峠

甘酢っぱい感じが良かったから。美味しかった。(笑)
 少女が可愛かった。峠にはテニホがいい。
 「こちはすっごく好きなテニホだったから。
 好きな人を教えてほしい。素手が臭くなる感じ。」

【図版④】

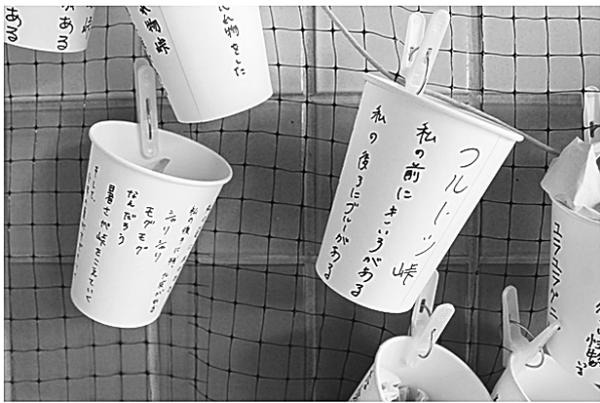




【図版⑨】



【図版⑧】



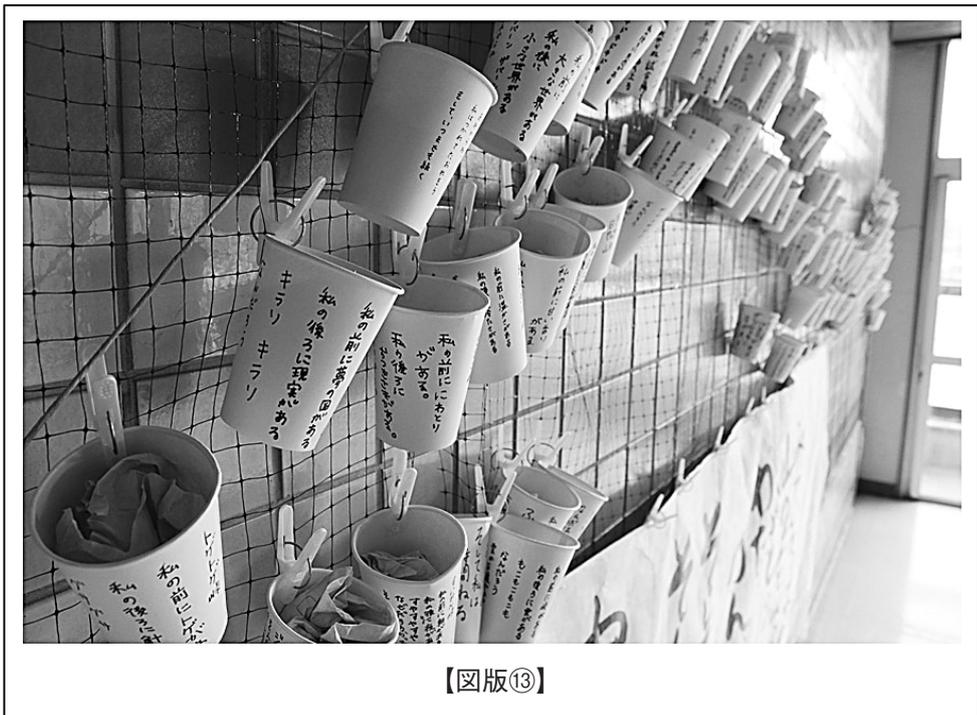
【図版⑩】



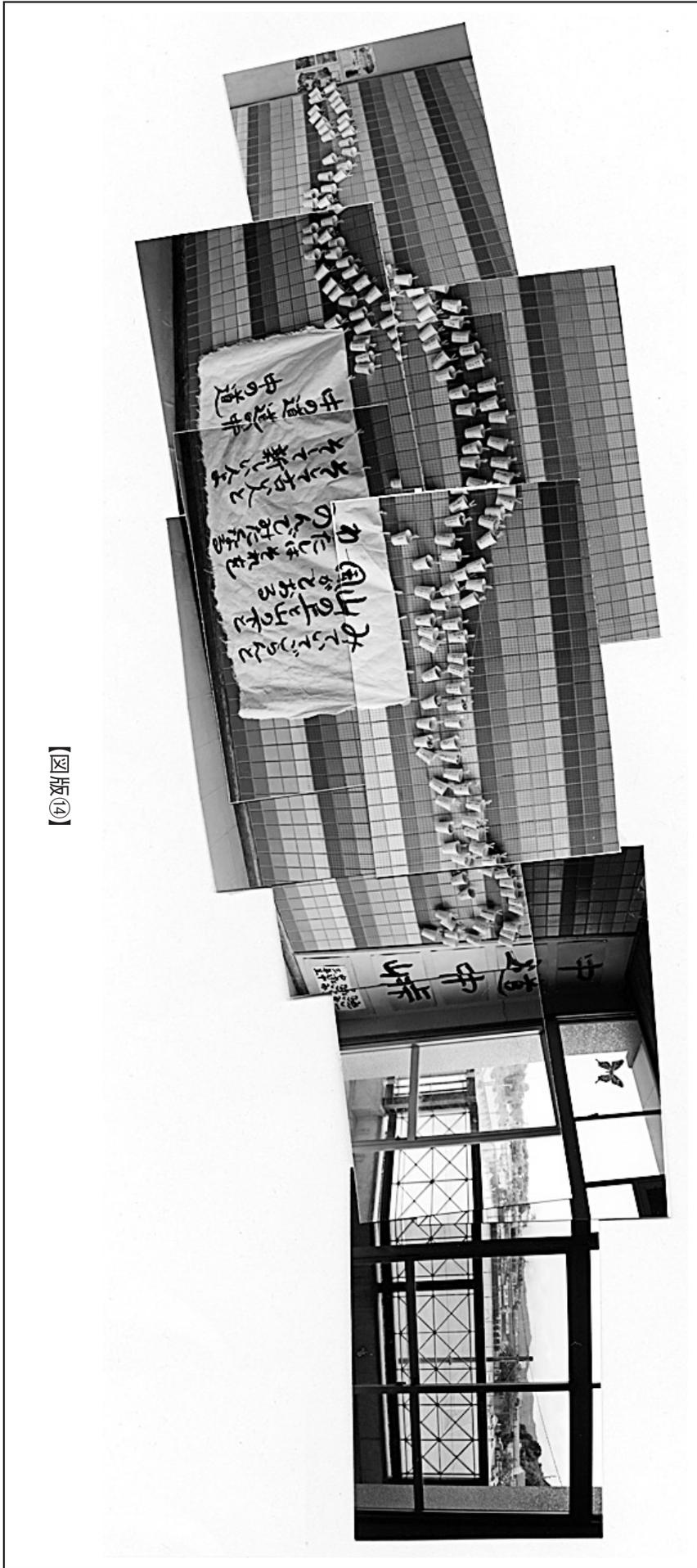
【図版⑫】



【図版⑪】



【図版⑬】



【図版⑭】